

編集後記

本月号の特集は姿勢調節である。姿勢保持の機構は真に複雑であり、さまざまな反射機構が絡みあい、ヒトの特異的な移動手段である2本足による歩行を可能にしている。これに関しては、各領域から多くの研究がなされている。しかし、評価方法や器械などの著しい進歩にもかかわらず未解決の部分もあり、古くて新しいテーマである。

これを研究課題としてとりくんでおられる先生方に解説をして頂いた。いずれも力作で姿勢調節についての知識を得る上でも読みごたえのある号となった。リハビリテーション医療を進めるにあたっても参考になることが多い。

疾患別では姿勢調節に問題の多い運動失調、脳卒中後片麻痺、脳性麻痺、脊椎側彎症をとりあげたが、渡辺教授も指摘されているように、各種の疾患からの欠落の機能や、その代償性を含めた点から検討を加えていけば、新しい事実も解明される可能性もある。このことから考えても、リハビリテーション医学に課せられた責は大きいものといえよう。

先月号より始まった2つの講座も、臨床に直結したテーマである。その1つはリハ医に

とって、日常の診察の場でとりあつかう機会の多い高血圧に関して、浅山氏らは基本となる薬物療法を中心に論述している。もう1つのものは脊髄障害の性の問題である。リハ医は各種の障害者と生涯にわたりおつき合いをしなければならない立場にあるので、脊損者から性の問題に関して相談を受けることがある。これについて、石堂先生から分かりやすく解説して頂いた。

巻頭言の稗田先生のご提言も興味深い。古くから、リハビリテーションに従事され、今日のリハビリテーションの基礎作りをされた先達の先生方のご活躍のあとがしのべられると同時に、高齢化社会に突入した現在の老人の問題、特に今後増加する寝たきり老人についても言及されている。これに対しては、新しい行政の対応の必要があるものと考えられ、新しく真剣に検討を加えられるべき課題であろう。

本月号も充実した号をお届けすることができたが、年間で最も寒い季節の2月であるので、読者の皆様も寒さに負けず、体調に留意され、ご活躍されんことをお祈りしたい。

(緒方 甫)

次号予告(第13巻 第3号)

特集 整形外科治療における最近の進歩

はじめに……………自治医大 大井 淑雄
側彎症手術療法……………千大・整形外科 北原 宏
変形性股関節症……………昭和大藤が丘病院整形外科 黒木 良克
腰椎椎間板ヘルニアの治療における最近の進歩

……………自治医大 大井 淑雄
頸部脊髄症……………慶大・整形外科 平林 洌・他
膝内障……………横市大・整形外科 腰野 富久・他
＜対談＞ 整形外科治療における最近の進歩……………天児民和／大井淑雄

巻頭言 リハビリテーション医療における治療……………国立大阪南病院 博田 節夫

研究と報告 頸椎間歇牽引における角度因子……………名大・理療部 伊藤不二夫・他

頸髄損傷者への車椅子処方：追跡調査による

問題点の検討……………国療箱根病院 里 宇明元・他

講座 リハ医に必要な全身管理

3：閉塞性呼吸障害……………国療東京病院 出口 明

リハビリテーション医学と性の問題

3：脳障害と性の問題……………鹿大霧島分院 川平 和美・他

一頁講座 義肢のパーツ

3：定・可変摩擦膝、ブレーキ膝……………兵庫リハセンター 中川 昭夫

編集顧問

天 児 民 和
大 島 良 雄
河 邨 文 一 郎
五 味 重 春
砂 原 茂 一
津 山 直 一
土 屋 弘 吉

編集委員

明 石 謙
上 田 敏
緒 方 甫
大 井 淑 雄
大 川 嗣 雄
千 野 直 一
横 山 巖

編集同人

赤 津 隆
今 田 拓
今 村 哲 夫
岩 倉 博 光
江 口 壽 榮 夫
小 川 孟
荻 島 秀 男
奥 川 幸 子
加 倉 井 周 一
小 島 蓉 子
斉 藤 正 也
笹 沼 澄 子
澤 村 誠 志
高 橋 勇
高 松 鶴 吉
武 智 秀 夫
土 屋 和 夫
土 肥 豊
永 井 昌 夫
中 村 隆 一
野 島 元 雄
野 村 欽
長 谷 川 恒 雄
初 山 泰 弘
福 井 園 彦
松 村 秩
三 島 博 信
矢 谷 令 子
米 本 恭 三
渡 辺 英 夫
(五十音順)

(細田, 山田)